

### 33. クマゲラの生息調査とその生態観察

弘前営林署 ○ 内海和徳  
上川原 一夫

#### 1. はじめに

近年森林に対する国民の関心は、かつてない高まりを見せています、中でも優れた自然景観を呈し、多様な動植物が生息する天然林の多い国有林においては、自然保護と林業の調和の問題が急増しており、施業のあり方や、保護すべき森林の取扱いについて、いろいろの問題が提起されているところである。

当署においても、国の天然記念物「クマゲラ」が尾太国有林において地元アマチュアカメラマンにより撮影され、新聞報道されたことから端を発し、伐採の凍結や、林道開設の中止等が余儀なくされた。

このことは、クマゲラそのものの生態等も明らかでなく、また、保護対策も確立されていないということからであり、平成 2年6月18日「クマゲラ保護のための当面の措置について」の局長通達のだされ、以後この通達により取扱うことになったが、当署では、新聞報道された4月時点でこれに関する保護要請等を懸念し、弘前大学や地元日本野鳥の会と保護観察を進めてきたところであった。

その後、通達により生息調査をした結果、他の2地点においても巣穴木と固体が発見された。

これらの結果から、弘前営林署管内におけるクマゲラに関する基礎的知識と調査事例並びに観察結果を、今後の森林施業に反映させるため、取りまとめたので紹介する。

#### 2. 調査観察の結果

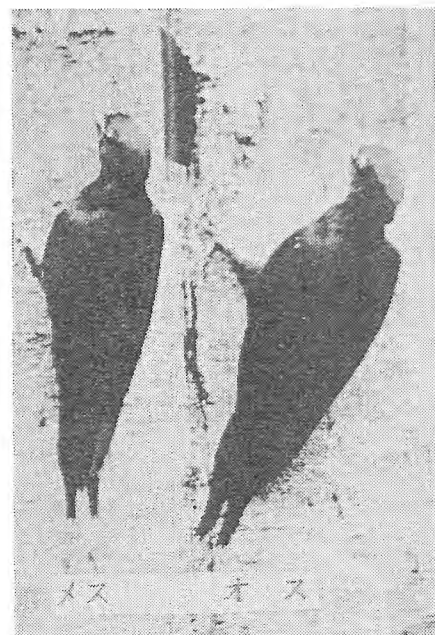
##### (1) クマゲラはどんな鳥なのか

- ※ オスは前頭部から後頭部まで赤く、赤いベレーボーをかぶっているようにだといわれている。(写-1)
- ※ メスは後頭部の先がチョット赤いだけでオスのベレーボーとはっきり違いが分る。(写-1)
- ※ 大きさは、45cm前後で、メスはオスより若干小さい。
- ※ 鳴き声は、その状態(状況)等により使い分けされているようである。

(♣ コロ・コロ・コロ・・・)

- ▷ 飛んでいる時によくこのように鳴いている。

(写-1)



(♣ キャー・キャー・・・)

▷ 巣穴木の周辺でよく聞く鳴き声で、クマゲラでなければ発しない独特の鳴き声であり、クマゲラを確認するための大事なポイントと言える。

(写-2)

## (2) 採餌木

クマゲラが採餌するのは、立ち枯れ木(写-2) 伐根・転倒木等が腐朽したものから採餌するが、積雪の関係で夏と冬では若干違い、夏は採餌できる対象物が多いことから、比較的近いところで「エサ」を確保することができるが、冬になると立ち枯れ木に限定されることから、採餌するための行動範囲は広がるものと思われる。

クマゲラによる食痕の特徴は、一般に大型で深さが10cm程もあり、嘴による切削あとは数mm~1cm弱もある。(写-3)

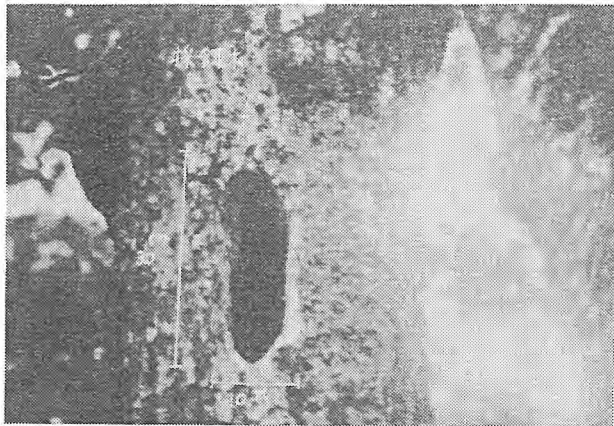
また餌は、アリ類(主にムネアカオオアリ)を採餌している。

採餌木のha当たりの密度は、文献では1.6本/haと記されているが私達の調査では、採餌木が容易に発見されたことから、密度はもっと高いものではないかと思われる。



採 餌 木

(写-3)



採 餌 木

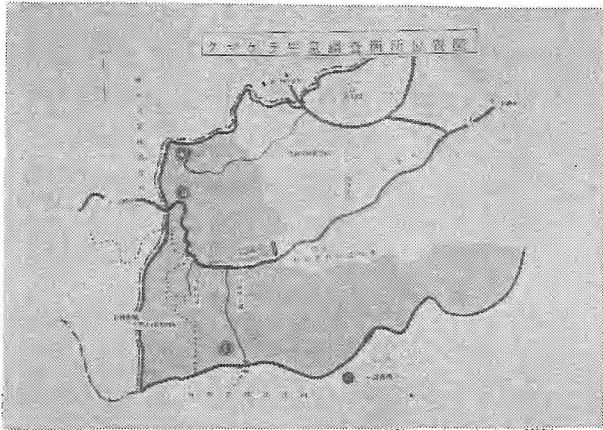
## (3) 行動範囲

行動範囲は、北海道の東大演習林の例でペアーで約300haといわれているが、私達は、林道新設に当たり収穫対象林分を調査した結果A・B・C・3地点(写-4)で営巣木と固体を発見したものであり、その巣間距離約5kmであるが、そ

の間には人工林も介在しており、行動範囲というよりは営巣環境に適した箇所がこれしかなかったとも考えらる。

従って行動範囲は今後の調査を待たなければならない。

(写-4)



(4) クマガエラの繁殖生態

ア. 私達は、1月17日産卵のため巣穴の掘り直しをしている営巣木を発見した、営巣木の下には、木クズが一面に散乱していた。木クズは巾1cm・長さ10cmもあった。(写-5)



イ. 次の表(表-1)は、私達の調査した”A”地点と江川氏の奥赤石の例によるものであるが、ペアリングから巣立ちまでの日数を簡単に表した。

(表-1)

散乱している木クズ

繁殖生態記録			
	文献等	弘前 (A地点)	鯉ヶ沢 (奥赤石)
つがい形成期	3月中旬~3月下旬	/	/
造巣期	3月下旬~5月上旬	/	/
産卵期	5月上旬	5月27日産卵	4月29日産卵
孵化期	5月中旬~下旬	6月21日孵化 →25日間	5月24日孵化 →25日間
巣立期	5月下旬~6月下旬	7月7日巣立 →17日間	6月18日巣立 →16日間
産卵~巣立ちまでの期間	42日間	42日間	41日間

ペアリングや巣造りの時期については、調査できなかったが、文献等によれば

※ つがい形成の時期は = 3月中旬から3月下旬

※ 巣造りの時期は = 3月下旬から5月上旬

といわれている。

私達は、抱卵 ~ 巣立ちまでの記録を、文献等や奥赤石の例と比較して見たが、それによると ※抱卵期間が25日間と・奥赤石と全く同じであった。

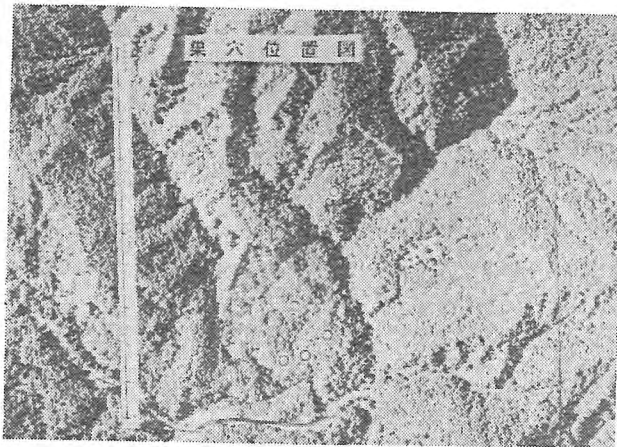
※ 孵化してから巣立ちまでは、弘前17日間・奥赤石が16日間と殆ど一致していることを確認した。

また、この期間オス・メス交替で抱卵や給餌をしていることも確認した。

(5) クマゲラの住む環境

クマゲラはどんな環境のところに住んでいるか、営巣木やねぐら木のある区域を調査した。私達が調査したA・B・C・3ヵ所は、標高・地形・林況とも殆ど共通した調査結果であった。ちなみに白神山地の「クマゲラの森」と言われている所もほぼ同様であった。

ア. 地形等の特徴は(写-6)(図-1)のように、沢が分かれ、必ず山抜け、または、崩落して出来た



(写-6)

背後に急斜面を持つ「台地」であるということである。

この台地の面積はあまり大きくなく、約1畝前後である。

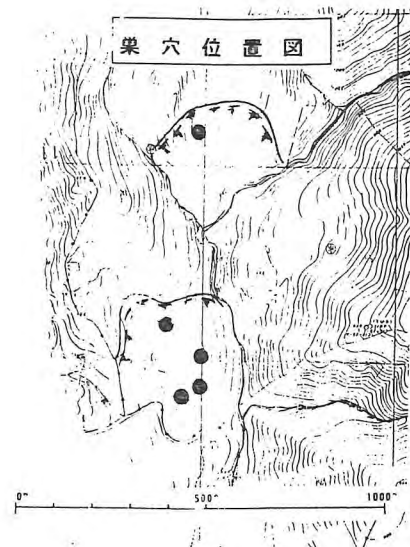
標高は約470m~580mの範囲にあり、ウダイカンバ・ナラが若干混入している、ブナ主体の天然林である。

(図-1)

イ. 林況

この台地は、付近の林分と客観的に比較しても、樹幹配置もよく、大径木も多く、かん木やササなどが少ない、比較的林内も明るい箇所である。その中で特に目立つ胸高直径約60cm~80cm・樹高約24m~27mで枝下高約10mのやや前傾した木に巣穴を彫っている。

(写-7)



エ. 巣穴

巣穴は、「子育てのための穴」か「ねぐら穴」なのかは、その利用によって区別するものである。そして一本の木に数箇所穴がある場合、一番上の穴を「子育ての穴として」使用しているようである。

巣穴の大きさは、ねぐら穴は横が約10cm・縦約14cmで、営巣するための巣穴は、横が約14cm 縦約20cmと、ねぐら穴に比べひとまわり大きい。

巣穴の方向性は、ほぼ山を背にした方向に彫られている。

巣穴の数はA・B・C・3地点の観察結果は、1個から6個であり、位置関係は不規則であるが、おおよそ(図-2)のようになっている。

(写-7)



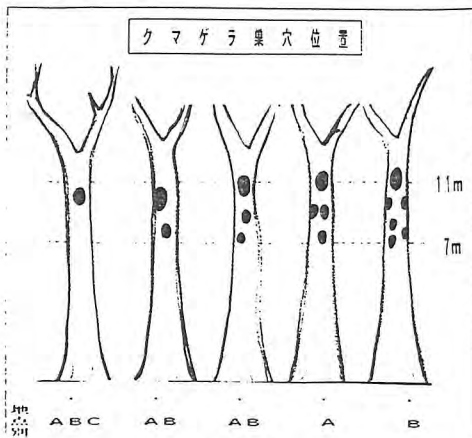
巣穴のある林内

(写-8)



巣穴木

(図-2)



巣穴の位置

### 3. まとめ

#### (1) 森林施業について

巣穴が確認された場合の森林施業については、「通達」に基づくことが原則であるが、A・B・C・3ヵ所とも巣穴木などは約1HA程度の広がり数本あり、団地性をもっていることから、伐採箇所の線引きについては、その団地の所在する地形環境によりその影響度を考えて決定すべきであり、また、この区域内に将来巣穴木に使われると予想される「候補

木」については残存すべきであると思う。

クマゲラの住んでいる林分環境は比較的明るく、蜜でないことから、巣穴木の団地を除き30%の択伐は影響がないものと思う。むしろ伐採を入れることにより、伐根・枝条等、採餌カ所が増加する効果があることは、すでに文献等で明らかである。

伐採作業の時期は、巣穴木等からクマゲラが離れてしまうといわれている7月下旬以降が適当でないかと思われる。

#### (2) 生息調査のポイントについて

クマゲラの生息を確認するということは、 固体そのものと・鳴き声・

巣穴・食痕等である。

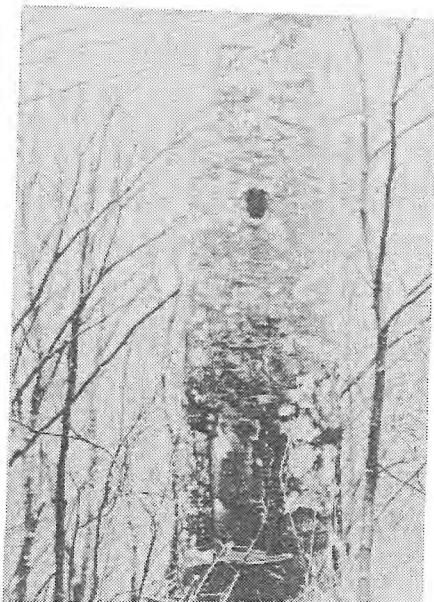
通達に基づく調査は、「巣穴を基点に半径何メートルは保残する」ということから、固体そのものより、巣穴を確認しなければならない。

巣穴を確認するためには、まず空中写真や地形図等により、標高500m前後の「山抜け」「崩落」等により出来た台地状の地形をポイントとし、そのポイントされた地点について、枝下高10m以上で、胸高直径60～80cmの樹形のよいブナの立木が揃っている箇所を重点的に調査することが巣穴木の発見には効果的である。

### (3) 留意事項

「国の天然記念物クマゲラ」という稀少性から、マスコミ等による報道が基となり、不特定多数の知るところとなって、結果的にクマゲラの生息そのものに悪影響を与えることになることが最も注意を要するところである。

### ※ 参 考 写 真



巣 穴



給 餌



オス・メス交替の給餌